

川瀬俊治・文京洙編 『ろうそくデモを越えて 韓国社会はどこに行くのか』

東方出版, 2009 年

本書は2008年5月に米国産牛肉の輸入条件緩和を発端として始まった「ろうそくデモ」と称される大規模な抗議活動を軸に、韓国社会がどのように変化しているのか、その実像に迫った好著である。

本書の構成は、3部から成る。第1部「市民運動の新たな胎動」は、「希望製作所」常任理事であり、韓国を代表する市民運動家の朴元淳へのインタビューから始まり、環境運動、平和運動、北朝鮮への人道支援を行う団体などの活動を紹介している。第2部「ろうそくデモの現場から」は、さまざまな角度から「ろうそくデモ」を検証するとともに、「ろうそくデモ」の意義と今後の課題について明らかにしている。第3部「韓国社会のいま、そして未来」は、韓国の労働運動や非正規労働者の置かれている現状と課題、国際結婚による移住者の急増と外国人労働者の流入拡大を背景とした外国人政策の変化、駐韓米軍問題や南北関係など、現代韓国社会が直面している多様な課題とそれに対する市民運動団体の取り組みを多面的に考察している。

19人に及ぶ筆者の顔ぶれは、韓国、日本、在日コリアンの市民運動家、研究者、ジャーナリスト、写真家など多彩である。

本書は、韓国社会で何が課題とされ、市民社会が現在どのような方向を模索しているのかを知るために極めて有用である。一方、総花的なきらいがあり、論文やルポの寄せ集めのような中途半端さが読後感として残り、中には感情過多の論考も見受けられる。ただ、冒頭の朴元淳へのインタビューと第3部の文京洙の論考「民主化以後の韓国社会と市民運動の行方」は秀逸であり、韓国の市民運動の今を知るために必読であろう。

ただ、惜しむべくは、本書の核ともいえるべき「ろうそくデモ」を生み出した社会的背景への掘り下げが物足りないことである。孫錫春の論考では、「ろうそくデモ」において公共部門の民営化が重要な争点として浮上した背景について、韓国経済の転換過

程から鋭く切り込んでいる。しかし、中高生や若い母親、働き盛りの会社員など、それまで相対的に政治や市民運動と距離があった人々を「ろうそくデモ」という直接行動に集結させた原動力が何だったか、今ひとつ鮮明に伝わらない。

「ろうそくデモ」は、当初は中高生が、後には大人たちが広場や街頭へと繰り出し、生活に密着した食の安全性に対する異議申し立てから始まり、教育政策、医療保険などの公共部門の民営化など、李明博政権の政策全般に対する批判行動へと拡大した。ろうそくの灯火は、韓国の人々の生活世界を覆う閉塞感の発露であり、厳しい競争と序列化の中でサバイバルを強いられ、弱者切り捨ての政策に不安や不満を抱えながら生きる韓国の人々の悲鳴のようにも見えた。その一方、自分たちの要求を直接表現する行動に出ることで街頭という共同の場を得た人々の間には、つかの間の一体感を楽しむかのように、祝祭にも似た高揚感が漂っていた。

しかし、この「ろうそくデモ」の中心に市民運動団体が位置することはなく、いみじくも「ろうそくデモ」は、市民運動団体と市民との乖離を照らし出すものとなった。

「ろうそくデモを越えて」という本書のタイトルが何を意味するかは、冒頭のインタビューで朴元淳が述べた、「今後は『ろうそくデモ』に表出された人々の要求や参加のエネルギーを市民運動が組織化し、動力とすることが主要課題であり、『ろうそくデモ』が投げかけた課題や問題提起を、日常の市民活動の中で具現していくべきだ」という主張に表れている。

持続的な社会発展を担う存在として、この先も市民運動団体は存立できるのか、今まさに岐路に立たされているといえる。「ろうそくデモを越えて」、その先に韓国社会の希望が見えてくるのか、隣国に住む我々も無関心ではられない。

(春木育美 東洋英和女学院大学)